

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八二八

《誰にも訪れる「分かれ道」》

西武百貨店のメインステージは何時も「KENZO」「KANSAI」「SAKIZO」で展開されてきました。昨年そのうち二人が他界され呆然としました。生まれてこの方意識を持ち出して、石油ショック、バブル崩壊、リーマンショック、地震や台風などの大災害、そして未曾有のコロナ禍と色々な節目を体験してきました。

その折々で、時代のせいにする人と、自分が至らなかったと反省する人に分かれます。1970年後半西武百貨店池袋本店の2階に、デザインナズブランドを集結、フォークロア・コーナードとして約200ブランドで展開、現在生き残っているブランドは片手くらいとか？噂では、ワイズの本耀司が2009年最後の民事再生であったとか？生き残る事の難しさが身に沁みます。

京都市京セラ美術館

1月23日〜4月11日

《うたかたの瓦礫(デブリ)》

「明治」の美術が日本における美術そのものの夜明けであったように、「大正」の美術が自我を持った絵描きたちによる叫びと前衛の新興であったように、「昭和」の美術が戦争の前後で光と影のような対照を見せ、その後、民主主義と平和憲法に倣い数々の分派へと枝分かれしていったように、そのような輪郭だった美術の容貌(精神)を果たして「平成」の美術は持っているだろうか。ここではそれについて、自然災害や事件、事故、経済危機が多発した時代における複数の美術家たちによる「密」な集合的活動の集積として捉え、バブル経済の崩壊と東日本大震災(福島原発事故)を念頭に鴨長明「方丈記」と磯崎新「瓦礫(デブリ)の未来」に倣って「うたかたと瓦礫(デブリ)」と呼ぶことにしたい。―榎木野衣

私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

《11の国のアメリカ史/コリン・ウッド著》

昨年11月、世界が注目する米大統領選挙は民主党のバイデン候補が勝利した。世界の秩序、経済に大きな影響力を持つ米大統領である。これからのような政策を取るか大いに注目される。さて、選挙戦中出たキーワードが「分断」である。本書は「アメリカは一つではなく11ものネイション(文化圏)から成り立っている。それらの間の相克の歴史として北米の歩みを描きなおすユニークな歴史書」であり、著者はアメリカは建国時から一つの国家ではなく分断していると捉えている。例えば米国北東部の「ヤンキーダム」はピュリタンが多く「個人の自己犠牲よりも全体の善を考える」集団とされ、独立心旺盛な「グレーターアパラチア」とは価値観は正反対である。ニューヨークやサンフランシスコだけがアメリカではない。アメリカの深層を理解するのに最適の一冊である。

土口哲光和尚の説法

《「よろこび」は、足元にある》

相撲は摺り足が基本で、神仏の儀式も出仕者はしずしずとスリ足をつくって運ぶのである。これが老人になると、自然と足が上がらずに、スリ足状態になってしまう、よくけつまづくのである。大阪守口市の真宗大谷派清澤寺・澤田秀丸前住職の著書「心のことば」に「けつまづく」と題して「老人になれば、ロシアや中国の兵隊さんを真似ようあれだけ足を上げて歩けば、けつまづくにすむ」と。この一言に思わず笑った。が、私は八十歳を一年前に車の運転を中止し、もっぱら歩け歩けで、都度にこの言葉どおり、足を高く上げる場合がある。確かに生きる上で欠くことのできない「よろこび」が、自分の足元にある。と、日々の歩みの中で、気づかせていただいている。

季節の家庭料理 田村 真紀

《二月 チキンアドボ・フィリピンの家庭料理》

《作り方・四人分》

鶏手羽元十二本・玉ねぎ半個・んにく二かけ・ゆで卵四個・ローリエ二枚・酢、水各半カップ・酒大匙二・砂糖大匙二・醤油大匙四・黒コシヨウ小匙一半・油適宜

鍋に油を熱し、みじん切りにした玉ねぎとんにくを中火で香りが立つまで炒め、玉ねぎがしんなりしてきたら黒コシヨウをすりこんだ鶏肉を加え肉の表面がこんがりするまでさらに炒める。水酢、ローリエを加え、落し蓋をして弱火で十分ほど熱したら、酒、砂糖、醤油を加え落し蓋と鍋蓋をしてさらに弱火で十分ほど熱する。蓋を取ってゆで卵を加えたら火を強め、鍋返しし、鶏肉に照りが出て煮汁が少し残るくらいまで煮詰める。

つれづれの記 山崎 辰巳

《これまで、を否定する勇気を》

この数年、年賀はがきの減少が綴いて、パソコンや携帯メールで年始挨拶を代用する層、古希や喜寿などの賀寿年齢を機に虚礼を廃止する高齢層。ビジネス社会でも効率を優先し、儀礼的要素の強い年賀やカレンダーの廃止に踏み切った企業も多いと聞く。どれも変化に順応した一例だ。コロナウイルス感染拡大という異常事態によって、当たり前と思われた常識が根底から覆され、身につけたはずのノウハウや経験値、価値観が何の役に立たないことに気づいた人たちが少なくない。コロナ終息を待つより前に我々は、過去の延長上にある習性や価値観を根こそぎ否定し、気づかずにいた無駄や無理を排除し、合理的な発想に立って、躊躇なく勇気ある再スタートを切りたいものだ。